

にいがた教育フォーラム 2018 in July

高木幸子

7月28日(土)、新潟大学教育学部において様々な立場の方と集い、教育や子どもについて語り合い、ともに学び合う機会として「にいがた教育フォーラム 2018 in July」を開催した。今回は、「教員のキャリア形成に関わる教職大学院の役割と教育委員会との連携 - 教員育成指標をどう活かす? -」をテーマにしたシンポジウムとラウンドテーブルで構成して進められた。県内外の教職員、大学教員、教育委員会指導主事や一般の方々等、200人の参加を得て活発な議論が展開された。

【プログラム】	13:00～13:10	開会
	13:10～15:00	シンポジウム
	15:15～16:45	ラウンドテーブル

1. シンポジウムの概要

シンポジウムは、教職大学院からの話題提供、3名のシンポジストからの話題提供及び意見交換、フロアとの質疑応答の流れで行われた。主な内容は以下の通りである。

(1) 教職大学院からの話題提供

・ 小久保美子 (コーディネーター：新潟大学副学長)

法令文書や策定指針に示されているように、一人一人の教員が指標策定の原点をしっかりと踏まえ、生涯学び続けていく姿勢を持つことが求められている。育成指標の根本的な意義をフォーラムの場で参加者と共有したいと考えテーマ設定した。

(2) シンポジストからの話題提供

・ 宮 蘭 衛 (新潟大学教育学研究科研究科長)

育成指標の公表を教職大学院・学部と教育委員会の連携を深める好機と捉えた。「有識者会議報告書」(H29.8.29)を参考に、教職大学院における研修システム像を示し、教員のニーズ・課題に応える多様なキャリア形成・コースを支えるための連携システムの具体化に向けた検討が今こそ必要である。

・ 阿部 勉 様 (新潟県教育庁義務教育課参事)

「成長する子どもとともに学び続ける教員でありたい」そんな

な願いをもつ教員の道標として、新潟県教員等育成指標を積極的に活用し、日々の業務と結びつけながら自らを成長させて欲しい。教員としての資質を高めるために教職大学院の存在は有意義である。「養成・採用・研修」というサイクルの中で、それぞれの役割を考え、連携を密にしていきたい。

・池田浩様（新潟市教育委員会学校人事課課長）

育成指標策定の趣旨や内容、活用方法等について、職種ごとに指標を作成したことや新潟市教育ビジョンとの関連性についてなど、新潟市の特長となる点を取り上げ説明した。教職大学院と連携し、育成指標を基軸として未来の教育にむけたビジョンが明確になった。今後も共に考え、「養成・採用・研修」の一体的改革を目指したい。

2. ラウンドテーブルの概要

参加者は、自身の課題意識を基に参加分科会を決定した（参考：表1）。年齢・役割・立場を越えた参加者が少人数のグループを構成して自己紹介を初めとして議論を始めた。一般参加者や院生からの話題提供に基づいて議論を深めるグループ、それぞれの実践や悩みから共通テーマを見出して、お互いの悩みを出し合い議論するグループなど、各分科会の議論を深め合う様子は多様であったが、どの分科会も、時間がたつにつれ、議論が活発になっていることが伺えた。

表1 ラウンドテーブルの分科会と内容

分科会	キーワード
1 教育課程編成	①社会に開かれた教育課程, ②カリキュラムマネジメント, ③各教科等横断(各種教育等), ④異校種間連携, ⑤一貫教育(幼保・小・中・高), ⑥その他
2 授業づくり	①教科の本質(見方・考え方), ②資質・能力, ③一人一人の学び, ④教材・学習課題, ⑤対話, ⑥協働, ⑦問題解決, ⑧その他
3 生徒指導・教育相談	①道徳教育の充実, ②いじめ, ③問題行動, ④不登校, ⑤ソーシャルスキル, ⑥関係機関やカウンセラーとの関係, ⑦キャリア教育, ⑧子どもの発達理解, ⑨その他
4 学年・学級経営	①人間関係づくり(教師と子ども, 子どもと子ども), ②学級・学年活動(話し合い, ルール作り, 自治的活動等), ③社会性の育成, ④開かれた経営, ⑤その他
5 学校経営	①チーム学校(協働性, 同僚性等), ②組織マネジメント, ③研修・研究の充実, ④地域連携, ⑤コミュニティ・スクール, ⑥社会の変化への対応, ⑦その他
6 特別支援教育	①インクルーシブ教育システムの構築, ②学習参加のための工夫, ③自己理解と就労支援, ④多職種・他機関連携, ⑤早期発見・早期対応, ⑥その他

にいがた教育フォーラム 2018inJuly 案内チラシより引用

本報告は、当日の記録と共に、教育フォーラムの案内チラシや「教職大学院 News letter 協創第7号」の記述を基に作成した。